The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
PSJ2020 CONFERENCE PROGRAM

第２３回（2020 年度）大会プログラム・発表要旨集

日時：2020 年 11 月 25 日（水）～29 日（日）

会場：大会特設サイト（オンデマンド方式）

日時：2020 年 11 月 28 日（土）／29 日（日）

会場：Zoom（リアルタイム方式＋質疑ライブ）REMO（談話室・懇親会）

★　本プログラム目次　★

大会テーマ・スケジュール・大会参加登録・・・・・ p. 2
プログラム一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 3

【オンデマンド方式】　（25 日～29 日 大会特設サイト）
28 日　ワークショップ・質疑ライブ・・・・・・・・ p. 7
口頭発表オンデマンド・質疑ライブ・・・・ p.11
ポスター発表・質疑ライブ・・・・・・・・・ p.13
ポスター発表・掲示板質疑のみ・・・・・・ p.14
29 日　口頭発表オンデマンド・質疑ライブ・・・・p.15

【リアルタイム方式】
28 日　口頭発表リアルタイム・・・・・・・・・・・・p.18
会員総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.20
会長就任講演・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.20
特別講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.21
懇親会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.21
29日　口頭発表リアルタイム・・・・・・・・・・・ p.22
シンポジウム・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.23
閉会式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.24

談話室・書籍展示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.25

★大会テーマ★
おしゃべりな私たち：Keep doing pragmatics!

★　大会スケジュール（概要）　★

11 月 25 日（水）～29 日（日）

口頭発表オンデマンド方式・ワークショップの発表動画、並びにポスター発表のポスターを第 23 回大会特設サイトにて公開します。

特設サイトの詳細については参加費を支払い、参加登録をした方にお伝えします。

11 月 28 日（土）

9:30～11:25：ワークショップ質疑ライブ
9:30～15:50：口頭発表リアルタイム方式
11:35～15:05：口頭発表オンデマンド方式
・ポスター発表質疑ライブ
（12:10～13:10：休憩 60 分）
15:15～15:35：会員総会
15:40～16:40：会長就任講演　滝浦真人会長
16:45～17:45：特別講演　井出祥子先生
18:00～　　：懇親会

11 月 29 日（日）

9:30～12:10：口頭発表リアルタイム方式
9:30～12:30：口頭発表オンデマンド方式・
質疑ライブ
12:30～13:30：休憩 60 分
13:30～16:10：シンポジウム

★　大会参加登録・参加費　★

事前登録　一般会員 1,000 円、学生会員（院生・学部生）無料　非会員 1,000 円

※会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」で登録。
※今年度会費が納入済みでないと、事前登録はできません。
※事前登録には 1,000 円の事前納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。
※事前登録の締切は 11 月 20 日(金)です。
※非会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「参加申込フォーム」にて登録してください。

会費・大会参加費免除について：

日本語用論学会では、「令和 2 年梅雨前線豪雨等による災害」（激甚災害指定予定）による被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2020 年度会費」ならびに「2020 年度年次大会の参加費」を免除いたします。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

【日本語用論学会事務局】
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1
愛知教育大学　人文社会科学系　日本語教育講座　北野浩章　研究室内
E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp

日本語用論学会　第 23 回大会　プログラム(一覧表)

大会テーマ：「おしゃべりな私たち：Keep doing pragmatics!」

開催日時：　2020 年 11 月 28 日(土)、29 日(日)　9:30 開始
内　　容：　11 月 25 日（水）～29 日(日)　**オンデマンド方式**
　　11 月 28 日(土)～29 日(日)　**リアルタイム方式**

今大会は、以下の 2 つの方式を併用します。「指定の特設ページ」は、事前に参加登録を済ませた方にのみお知らせします。（大会 1 週間まえを目途にお送りします。）

オンデマンド方式	リアルタイム方式
発表動画を事前に視聴し、質疑応答は掲示板を用いて行います。一部の発表は、大会当日にリアルタイム方式での質疑応答も行います。	ZOOM を用いて発表と質疑応答を行います。詳しくは、28 日(土)と 29 日(日)のタイムテーブルをご覧ください。

大会のコンテンツは以下の通りです。

【ワークショップ】(3 件)

- **オンデマンド方式**で行います。指定の特設ページで動画を視聴し、質問は掲示板に書き込んでください。
- 質疑応答は、28 日(土)に、**リアルタイム方式**で行います。

【ポスター発表】(7 件)

- **オンデマンド方式**で行います。指定の特設ページに掲示されたポスターをご覧ください。
- 質疑応答は掲示板で行いますが、一部は 28 日(土)に**リアルタイム方式**での質疑応答も行います。

【口頭発表】　オンデマンド方式（13 件）

- **オンデマンド方式**の口頭発表は、ワークショップと同じ要領で行います。
- 指定の特設ページで発表動画を視聴し、質問は掲示板に書き込んでください。
- 質疑応答は、11 月 28 日(土)、29 日(日)のいずれかに、**リアルタイム方式**で行います。

【口頭発表】　リアルタイム方式（11 件）

- **リアルタイム方式**の口頭発表は、11 月 28 日(土)、29 日(日)のいずれかに行います。
- ZOOM 上で実施すること以外は、対面による通常の学会発表と同じです。

【特別講演】【会長就任講演】【会員総会】【シンポジウム】

- **リアルタイム方式**で行います。
- 28 日(土)は【特別講演】【会長就任講演】【会員総会】を行います。
- 29 日(日)は【シンポジウム】を行います。

【11 月 25 日（水）～29 日(日)】　オンデマンド方式

【ワークショップ】

	質疑応答 掲示板	質疑応答 ZOOM
WS-1: 配慮表現の対照研究　（代表：山岡政紀）　p.7 (1)　配慮表現はいかに普遍的であるか　山岡政紀（創価大学） (2)　日本語の配慮表現　小野正樹（筑波大学）、牧原功（群馬大学） (3)　英語の配慮表現　甲田直美（東北大学） (4)　中国語の配慮表現　李　奇楠（北京大学） (5)　アラビア語の配慮表現　リナアリ（カイロ大学）	○	11/28 A.M. Room B
WS-2: 新規表現のダイナミズム　（代表：松浦光）　p.8 (1)　事象構造メタファーからみた新規表現—「経験値」をめぐる冒険へ—　松浦光（横浜国立大学）、林智昭（近畿大学） (2)　英語由来「ザ」の日本語における新規用法　梶原彩子（名古屋学院大学） (3)　新規副詞「ワンチャン」の成立と拡大—2009 年の Twitter 用例を対象として—　菊地礼（中央大学） (4)　絵から文字へ、文字から絵へ　黒田一平（龍谷大学）	○	11/28 A.M. Room B
WS-3: 語用論研究におけるコーパス利用の可能性と留意点　（代表：山内昇）　p.10 (1)　言語能力，言語運用とコーパスデータ　大名　力（名古屋大学） (2)　日本語の小説における符号で表される沈黙に関する分析　新實葉子（立命館大学） (3)　中国語の自然会話における「不是」の談話機能について：マルチモーダル情報を含むコーパスに基づく調査　李　嘉（岐阜聖徳学園大学） (4)　字幕翻訳における談話標識の翻訳ストラテジーに関する語用論的研究：speaking of which を事例として　山内　昇（大同大学）	○	11/28 A.M. Room B

【ポスター発表】

質疑応答は掲示板で常時実施。ZOOM による質疑応答も一部実施。

	質疑応答 掲示板	質疑応答 ZOOM
若者ことば「ぴえん」の文法的特性と推論の負担について　工藤 俊（駒沢女子大学）p.14	○	
アメリカの大学生が用いる I don't know の用法について　小林 隆（群馬県立女子大学）p.14	○	
「カモシレナイ」のモダリティ機能　ー口語表現「おいしいカモ」語用論の観点からー　堀内夕子（大阪キリスト教短期大学）p.15	○	
否定の可能構文に見られる行為指示型の用法に関する分析ー先行発話及び動作主のタイプに基づいてー李娜(北海道大学大学院）p.12	○	11/28 P.M. B④, ⑥～⑧
"Shitakke" Conditional and Deontic/Evidential Modality in Hokkaido Dialect of Japanese　HIRAMA. Yuta（Otaru University of Commerce, student）、NISHIGUCHI, Sumiyo（Otaru University of Commerce）p.13	○	
広告表現における「2 つの視座」の分析　加藤久俊（フリー）p.13	○	
看護実習記録における「N がみられる」と「N がある」の使い分けについて　山元一晃（国際医療福祉大学）p.14	○	

【口頭発表】

質疑応答は掲示板で。ZOOM によるリアルタイムの質疑応答も実施する。

	質疑応答 掲示板	質疑応答 ZOOM
映画ポスターにおけるキャッチフレーズの語りの分析 ——日中対照研究——　王 珏奇（金沢大学大学院）p.11	○	11/28 A.M. B①②
会話内の other-speaker formulation のフレーム比較分析　西山 遥（慶應義塾大学大学院）p.12	○	
遂行発話は本当に宣言なのか　佐藤雅也（京都大学大学院）p.12	○	11/28 P.M. B③⑤
Self-praise and politeness: is gender relevant?　ITAKURA, Hiroko（Shinshu University）p.13	○	
英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能　金沢じゅん（東京大学大学院）p.15	○	11/29 A.M. B⑨～⑰
「寄与関係」の名詞修飾節における推論と明示化ー日韓語の対比を通じて　李 載賢（名古屋大学大学院）、堀江薫（名古屋大学）p.15	○	
中国人日本語学習者の謝罪に見られる方策使用の特徴　李 嘉隆（名古屋大学大学院）p.16	○	
慰め行動における性差 ——青春ものアニメの分析——　張 楽（金沢大学大学院）p.16	○	
接尾辞「-流、-式、-風」における含意の対立 —たとえの類型への示唆—　三田寛真（東京大学大学院）p.16	○	
人間関係は触覚メタファー：「べたべた」のメタファーを例に」　劉 俊蘭（関西大学大学院）p.16	○	
日本語修辞疑問文の（イン）ポライトネス　案野香子（静岡大学）p.17	○	
国会討論におけるイン／ポライトネスとジェンダー　柳田亮吾（大阪大学）p.17	○	
日本語の不満談話シークエンスの開始部における共通基盤化 —ロールプレイデータと日常会話データの比較から— ASAD, Marina Bahaa（立命館大学大学院）p.17	○	

【11 月 28 日(土)】 リアルタイム方式 （ZOOM を使用）

Room A
（口頭発表、講演）

司会： 岡本雅史（立命館大学）

① 9:30 ～ 10:05
LINE チャットの会話における感動詞の分析：日本語母語場面と日韓接触場面の比較を通して
楊 虹（鹿児島県立短期大学）
倉田芳弥（聖学院大学）p.18

② 10:10 ～ 10:45
中上級日本語学習者のヘッジ使用 －中間言語語用論の観点からの考察－」
堀田智子（東北大学）p.18

司会： 尾谷昌則（法政大学）

③ 10:50 ～ 11:25
「とは言っていない」「と言っているのではない」「と言っているわけではない」の使い分けに関する語用論的考察
森 貞（福井工業高等専門学校）p.19

④ 11:35 ～ 12:10
「V て、どうぞ」ーSNS における陳述副詞「どうぞ」の拡張的用法ー
三瀬凪乃（立命館大学学生）
岡本雅史（立命館大学）p.19

司会： 堀江薫（名古屋大学）

⑤ 13:10 ～ 13:45
Synchrony / Diachrony, Seeing from the Descriptive Perspective on Grammaticalization: The Case of Seeing
HAYASHI, Tomoaki（KINDAI University）p.19

⑥ 13:50 ～ 14:25
他動詞文における語用論ー介在性の他動詞文ー
前田宏太郎（東京大学大学院）p.20

⑦ 14:30 ～ 15:05
日本語とインドネシア語の禁止サインの比較 ―駅の禁止サインの「禁止表現」をめぐって―
MUTHI, Afifah（金沢大学大学院）p.20

10 min.

15:15 15:35
【会員総会】（20 分）

5 min.

15:40 ～ 16:40
【会長就任講演】（60 分）
司会：小野寺典子（青山学院大学）
日本語にイン／ポライトネス研究が必要なわけ
日本語用論学会会長
滝浦 真人
（放送大学教授）p.20

5 min.

16:45 ～ 17:45
【特別講演】（60 分）
司会：小山哲春（京都ノートルダム女子大学
場の語用論―パラダイムのハイブリッドを求めて
井出 祥子 先生
（日本女子大学名誉教授）p.21

Room B
（オンデマンド発表に対する質疑応答、各 15 分）

[Workshop 1]
配慮表現の対照研究
オーガナイザー：山岡政紀（創価大学）p.7

[Workshop 2]
新規表現のダイナミズム
オーガナイザー：松浦光（横浜国立大学）p.8

[Workshop 3]
語用論研究におけるコーパス利用の可能性と留意点
オーガナイザー：山内昇（大同大学）p.10

司会： 堀内ふみ野（大東文化大学）

① 11:35 11:50
映画ポスターにおけるキャッチフレーズの語りの分析 ―日中対照研究―
王珏奇（金沢大学大学院）p.11

② 11:55 12:10
会話内の other-speaker formulation のフレーム比較分析
西山遥（慶應義塾大学大学院）p.12

Lunch Break

司会： 有光奈美（東洋大学）

③ 13:10 13:25
遂行発話は本当に宣言なのか
佐藤雅也（京都大学大学院）p.12

④ 13:30 13:45
[poster] 否定の可能構文に見られる行為指示型の用法に関する分析 ―先行発話及び動作主のタイプに基づいて― 李娜（北海道大学大学院）p.12

⑤ 13:50 14:05
Self-praise and politeness: is gender relevant?
ITAKURA, Hiroko（Shinshu University）p.13

⑥ 14:10 14:25
[poster] "Shitakke" Conditional and Deontic/Evidential Modality in Hokkaido Dialect of Japanese HIRAMA, Yuta (Otaru University of Commerce, Sstudent), NISIGUCHI, Sumiyo (Otaru University of Commerce) p.13

⑦ 14:30 14:45
[poster] 広告表現における「2 つの視座」の分析
加藤久俊（フリー）p.13

⑧ 14:50 15:05
[poster] 看護実習記録における「N がみられる」と「N がある」の使い分けについて」
山元一晃（国際医療福祉大学）p.14

【11 月 29 日(日)】　リアルタイム方式　（ZOOM を使用）

Room A
（口頭発表、シンポジウム）

司会：　秦かおり（大阪大学）

⑧ 9:30 ～ 10:05
A Pragmatic Analysis of Interactions among Speakers of English as a Lingua Franca on a LEGO Task: Exploring the functions of other-initiated repairs in ELF communication
YAMAGUCHI, Masataka（Kobe City University of Foreign Studies）
TANIMURA, Midori（RITSUMEIKAN University）p.22

⑨ 10:10 ～ 10:45
The Appendor Wh-Question in Cascading Troubles Sequences
JONES, Sally（Nagoya University, graduate student）p.22

司会：　ツォイ・エカテリーナ（一橋大学）

⑩ 10:55 ～ 11:30
日本語の名詞句内における省略の談話的制約
松本大貴（京都大学大学院）p.22

⑪ 11:35 ～ 12:10
ロシア語の不定人称文の情報構造について
水野庄吾（京都大学大学院）
松本大貴（京都大学大学院）p.23

12:30

13:30 ～ 16:10
【シンポジウム】
会話分析の基軸と展開
司会：井出里咲子（筑波大学）

相互行為における認識性
早野薫先生（日本女子大学）

子ども（非定型発達児を含む）の相互行為
高木智世先生（筑波大学）

日本語教育における CA
岩田夏穂先生（武蔵野大学）

相互行為における身体資源
城綾実先生　（早稲田大学）

p.23

16:10 16:20
閉会式

Room B
（オンデマンド発表に対する質疑応答、各 15 分）

司会：　牧原功（群馬大学）

⑨ 9:30 9:45
英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能
金沢じゅん（東京大学大学院）p.15

⑩ 9:50 10:05
「寄与関係」の名詞修飾節における推論と明示化――日韓語の対比を通じて
李載賢（名古屋大学大学院）堀江薫（名古屋大学）p.15

⑪ 10:10 10:25
中国人日本語学習者の謝罪に見られる方策使用の特徴
李 嘉隆（名古屋大学大学院）p.16

⑫ 10:30 10:45
慰め行動における性差 ――青春ものアニメの分析――
張　楽（金沢大学大学院）p.16

司会：　小松原哲太（神戸大学）

⑬ 10:55 11:10
接尾辞「－流、－式、－風」における含意の対立 －たとえの類型への示唆－
三田寛真（東京大学大学院）p.16

⑭ 11:15 11:30
人間関係は触覚メタファー：「べたべた」のメタファーを例に
劉俊蘭（関西大学大学院）p.16

⑮ 11:35 11:50
日本語修辞疑問文の（イン）ポライトネス
案野香子（静岡大学）p.17

⑯ 11:55 12:10
国会討論におけるイン／ポライトネスとジェンダー
柳田亮吾（大阪大学）p.17

⑰ 12:15 12:30
日本語の不満談話シークエンスの開始部における共通基盤化 ― ロールプレイデータと日常会話データの比較から ―
ASAD, Marina Bahaa（立命館大学大学院）p.17

Lunch Break

★オンデマンド方式★

11 月 25 日（水曜日）～11 月 29 日（日曜日）　発表動画・ポスター公開

１１月２８日（土曜日）　質疑ライブ

ワークショップ（オンデマンド）質疑ライブ（9:30～11:25）
B 会場

ワークショップ１　/ Workshop 1(9:30～10:05)

●配慮表現の対照研究

オーガナイザー：山岡政紀（創価大学）

山岡政紀（創価大学）小野正樹（筑波大学）牧原功（群馬大学）甲田直美（東北大学）李奇楠（北京大学）リナアリ（カイロ大学）

①配慮表現はいかに普遍的であるか

山岡政紀（創価大学）

配慮表現は日本語だけの言語現象であろうか。井出祥子(2006)は、配慮表現とほぼ重なる敬意表現という範疇について、「おじゃまします」や「僭越ですが」など、「場」をわきまえた規範意識や謙譲の美徳といった日本文化独自の慣習に沿って選択の余地のない定型句が使用されると指摘し、対人関係等の文脈に依存して言語行動を選択すると考える B&L のポライトネス・ストラテジーでは説明がつかないと主張した。これはポライトネス理論の普遍性に疑義を呈するものでもあった。

これに対し、山岡政紀(2019)では、井出が指摘した「場に対するわきまえ」とは、「文脈とそれに対応するポライトネスの表現とが一体的に慣習化したことによってストラテジックでないように見える現象である」と主張し、「同様の言語現象は日本語以外の他言語にも見られる」ことを仮説として述べている。その結果、通言語的に見られる普遍的な配慮表現と各言語固有の配慮表現の両方が存在すると考える。

参考文献：(1) 井出祥子. 2006. 『わきまえの語用論』. 東京:大修館書店. (2) 山岡政紀. 2019.「配慮表現の定義と特徴」.『日本語配慮表現の原理と諸相』.東京:くろしお出版.35-50

②日本語の配慮表現

小野正樹（筑波大学）牧原功（群馬大学）

日本語の文末表現には対人的配慮を表す多様な形式が見られる。「その考え方には問題があります/問題があると思います/問題があるかもしれません/問題があるようです」等、思考動詞や蓋然性判断を用いたもの、感情表現を用いたものが多い。本報告の目的の１つは、これらの諸形式の用いられ方にどのような差異が見られるかの考察である。更に、聴者へある行為を働きかけようとする場合とその行為をしないように働きかける場合に、言語表現にどのような異なりがあるかを考察する。例えば、学校においては、「ゆっくり歩け」「ゆっくり歩いてください」といった依頼・命令よりも「走るな」「走らないで」のような禁止表現が多用されるという。「と思う」、「・・と嬉しい・助かる」、「かもしれない」、「ようだ」、「みたいだ」等の文末の配慮表現を取り上げ、依頼・命令・禁止などの発話行為によって、どのような使用傾向がみられるかを検討する。

③英語の配慮表現

甲田直美（東北大学）

西田光一を中心とする本プロジェクトの概要について述べる。英語の「I forgot to 不定詞」は自分が何かするのを忘れたと言って、聞き手にその忘れたことを言ってもらう間接的で定型的な依頼表

現である。この表現は依頼の意味がなく、相手に働きかける発話よりは、むしろ Goffman (1978)の言う窮状を自認する反応的発声(response cries)に近い。そのため、この表現を発話して依頼の行為が成立するには聞き手から話し手への配慮が必要である。配慮表現は話し手が聞き手に伝える配慮を表すものが主だが、配慮は双方向的であり、「I forgot to 不定詞」のように優位な聞き手から劣位な話し手への配慮に依存したものもある。後者は、表現自体ではなく対話での話者交替が配慮的であり、聞き手の利にもなるように Kissine (2013)の言う発語媒介効果(perlocutionary effects)を伴う。話し手と聞き手の双方向的な配慮の背後には Keysar (2008)の言う話し手の発話に伴う自己中心性が働いており、話し手と聞き手による互いの自己中心性の尊重が対話での配慮表現の共作を動機づけている。

参考文献：(1) Goffman, Erving. 1978. "Response cries," *Language* 54, No. 4, pp.787-815. (2) Keysar, Boaz. 2008. "Egocentric processes in communication and miscommunication," In *Intention, Common Ground and the Egocentric Speaker-Hearer,* ed. by Kecskes, Istvan and Jacob Mey, De Gruyter Mouton, pp.277-296. (3) Kissine, Mikhail. 2013. *From Utterances to Speech Acts*, Cambridge University Press.

④中国語の配慮表現

李奇楠（北京大学）

中国では、古来"和為貴"の文化伝統があり、現在、"和諧、平等、友善"などの価値観を大事にしている。そのような理念は人々のコミュニケーションに表れ、"打扰一下""僭越""真不巧"などのような配慮表現が使われている。

依頼や忠告のような発話機能において、様々な表現スタイルがある。例えば、相手に待たせる時、"稍等一下""请稍等"など動詞"等（待つ）"以外に、副詞の"稍（ちょっと）""一下（動詞の補語、動作の一回性や小数量の意味を表す）""请（頼む、～てもらう、お～ください）"などのような言語形式との組み合わせで、話し手の相手に「待つ」という行為を求める時の慣習的配慮的依頼表現となっていると言える。中国語の"能不能～？"も相手の能力を問う原義から派生して依頼表現として慣習化し、"可能"、"或许"のような副詞も日本語の「かもしれない」に相当するような断定をぼかすヘッジの機能が慣習化した表現に当たる。

参考文献：(1) 山岡政紀・李奇楠. 2004.「依頼表現の日中対照研究」《日本语言文化研究》第 5 辑.北京:学苑出版社.131-160 (2) 李奇楠. 2019.「慣習的配慮表現の日中対照」.『日本語配慮表現の原理と諸相』.東京:くろしお出版.197-212

⑤アラビア語の配慮表現

リナアリ（カイロ大学）

配慮表現は普遍的なものであり、どの言語でも他者との人間関係を良好に保つためコミュニケーション上必要不可欠である。本研究では日本語とアラビア語の配慮表現の類似点に焦点を当て対照研究を行った。その結果、日本語の配慮表現の原則がアラビア語にも適応できることが分かった。例えば、贈り物を手渡す時の「つまらないものですが」は山岡編（2019）が提示した「自己の負担が小さいと述べよ」の原則が働く発話であり、アラビア語でも同様の場面で「dy Haga basyta」(シンプルなものですが)が用いられる。一方、贈り物を受け取った際の「お気遣いありがとう」に相当する「Leh ta:abt nafsak kda」（なぜ自分を苦労させたんですか）という慣習化した配慮表現が用いられ、「他者の負担が大きいと述べよ」の原則が両言語でも働く。

参考文献：(1)山岡政紀編. 2019.『日本語配慮表現の原理と諸相』.東京:くろしお出版.

ワークショップ 2 ／ Workshop 2(10:10～10:45)

●新規表現のダイナミズム

オーガナイザー：松浦光（横浜国立大学）

松浦光（横浜国立大学）、林智昭（近畿大学）、梶原彩子（名古屋学院大学）、菊地礼（中央大学）、黒田一平（龍谷大学）

本ワークショップは、現代日本語における言語使用実態から意味変化の揺らぎを動的に捉えるこ

とを目的とする。Traugott and Dasher (2002: 24) によると、意味変化の過程においては語用論が主要な役割を果たしており、言語の動的な使用を行う話者の意図にもとづく文脈依存性をもった語用論的意味が、使用状況における意味変化を可能とするという。尾谷・二枝 (2011: 290) は、「全然～ない」といった否定構文が、先行文脈から得られる想定を否定する語用論的意味をもつと指摘する。各発表を通して、新規表現の創発の過程を、言語学的な動機づけに基づくダイナミズムとして捉え直す。借用、類推、再分析、音変化といった言語変化の諸要因と、柔軟な意味変化における語用論の役割を示す。

参考文献 : (1) 尾谷昌則・二枝美津子. 2011. 『講座　認知言語学のフロンティア②　構文ネットワークと文法: 認知文法論のアプローチ』. 東京. (2) Traugott, E. C. and R. B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge.

事象構造メタファーからみた新規表現―「経験値」をめぐる冒険へ―

松浦光（横浜国立大学）林智昭（近畿大学）

本発表では「経験値」を中心とした HP（ヒットポイント）、MP（マジックポイント）等のステータスをロールプレイングゲーム (RPG) の数値を通して理解するメタファー表現を論じる。RPG は、ゲームのクリアという目的を目指し、敵（困難）を倒しながら冒険する（進行する）という点では、事象構造メタファー (Lakoff 1993) において元フレームとされる「戦い」と「旅」の両側面を想定する。『大辞林』（第四版）においても人間の経験の度合いに対するメタファー表現として RPG から転じた「経験値が上がる」「経験値が高い」などの記述があり、理解の上では具体的な経験とも言える。先フレームは、目的のある「戦い」や「旅」と捉えられる活動の体験と達成を通して、「経験値」を上げると成長する（レベルアップ）という構造を持つ。以上について、概念メタファー<<目的の達成過程は RPG>>を提案し、「経験値」を位置づける。

参考文献 : (1) Lakoff, G. 1993. “The Contemporary Theory of Metaphor.” In A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought* 202-251. Cambridge. (2) 松村明（編）. 2019. 『大辞林』（第四版）. 東京.

英語由来「ザ」の日本語における新規用法

梶原彩子（名古屋学院大学）

本発表は、英語由来の「ザ」を考察対象とする。用例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』、SNS、広告文から収集した。日本語の「ザ」には、英語の定冠詞 the から文字通り借用されたもの（例 :「ザ・リッツカールトン」）、語調を整えるもの（例 :「ストップ・ザ・交通事故（警視庁）」）、聞き手に対して属性認知を促すもの（例 :「これぞ“ザ・久石”と言ってもいい (BCCWJ)」）、程度を指定するもの（例 :「最 the 高」）などがある。本発表では、日本語の「ザ」で英語本来の the の意味が希薄化し、話し手自身の判断や態度があらわされており、日本語独自の新規な用法を確立していることを指摘する。

参考文献 : (1) 瀬戸賢一・投野由紀夫（編）. 2012. 『プログレッシブ英和中辞典』（第 5 版）. 東京. (2) 樋口昌幸. 2009. 『英語の冠詞―その使い方の原理を探る―』. 東京.

新規副詞「ワンチャン」の成立と拡大―2009 年の Twitter 用例を対象として―

菊地礼（中央大学）

鑓水（2014）によると、「ワンチャン」は若者を中心に定着している語であり、名詞・副詞・文末用法を有する。名詞としては〈一回の好機〉の意味を担い、副詞・文末においては〈事象の生起の可能性〉を表す。「ワンチャン」は 2008 年からインターネットにおける使用が確認され、その時点では限定的なコミュニティーで用いられていた。2009 年 8 月から副詞的な使用が拡大し、名詞用法を上回る。副詞としては主に「X がワンチャンある」の形式で用いられる。2019 年 11・12 月からは「X がワンチャン」と「ある」の脱落した形式が出現する。これは共起が慣用的となり述部を省略しても理解可能になった結果である。このような「ワンチャン」の成立と拡大の実相を、Twitter を用いて 2009 年の全ツイート例を対象とした調査によって解明する。

参考文献 : 鑓水兼貴. 2014.「「全国若者語調査」結果概観」.『専修国文』. 94 号. 174-187.

絵から文字へ、文字から絵へ

黒田一平（龍谷大学／京都ノートルダム女子大学）

本発表では、言語使用における絵や文字の「意味」（＝表すもの）の動的な変容を論じる。伝統的に、文字は絵から発達したとされるが、絵が文字として使用される現象や、一旦文字として確立した

文字が絵として使用される現象については、あまり論じられていない。しかし、近年の電子掲示板やSNS 等では、絵文字が漢字のように用いられたり、文字が AA（アスキー・アート）や顔文字（の一部）として用いられたりする事例が見られる。これらは一見新規な現象に思えるが、江戸時代の判じ絵や文字絵にも同様の現象が見られる。一方、近年では、AA の一部が人名やキャラ名として用いられる例（「トェェェェイ」「ののワ」）のように、さらに複雑な様相を呈している。本発表では、現代の新規な事例と伝統的な事例の共通点と差異を探るとともに、絵や文字の「意味」が使用に際して動的に変容するという点を、これらの事例によって示す。

ワークショップ 3 ／ Workshop 3(10:50～11:25)

●語用論研究におけるコーパス利用の可能性と留意点

オーガナイザー：山内 昇（大同大学）

大名 力（名古屋大学）、新實葉子（立命館大学）、李 嘉（岐阜聖徳学園大学）、山内 昇（大同大学）

近年，コーパスの大規模化に伴い，語用論研究においてもコーパスの有用性が高まっている(Jucker et al. (eds) 2009; Aijmer & Rühlemann (eds.) 2015 参照)。しかし，コーパスを言語研究に使用する上で必要となる知識や検索上の技術，利用時における注意点などが十分に共有されておらず，研究で生じた問題について研究者間で明示的に原因を検討することが困難な状況にある。そこで本ワークショップでは，以下 2 点を通して，コーパスを利用した語用論研究のための基盤を提供する。第一に，言語研究資料としてのコーパスデータの性質および関連する概念に関する体系的な検討を行う。第二に，コーパスを利用した語用論研究の具体例を提示し，コーパス利用の可能性を示すと共に，各研究目的に沿ったコーパスの性質や利用法を批判的に検討し，データ収集時の留意点を明示化する。

参考文献：(1) Aijmer, K. & C. Rühlemann (eds.) (2015) *Corpus Pragmatics: A Handbook*. Cambridge University Press. (2) Jucker, A., D. Schreier & M. Hundt (eds.) (2009) *Corpora: Pragmatics and Discourse*. Rodopi.

1. 言語能力，言語運用とコーパスデータ

大名力（名古屋大学）

Leech (2002) は生成文法とコーパス言語学を対比し，生成文法の研究対象は言語能力 (I 言語)，コーパス言語学は言語運用 (E 言語) と述べているが，これは誤解に基づくものである。本発表では，Chomsky (1965) における言語能力と言語運用の関係を確認し，コーパスを用いた研究は，言語能力を研究対象としない場合であっても，言語運用ではなく言語運用に関わる言語能力以外の要因を対象とするものであり，その要因によって引き起こされたと考えられるコーパスでのデータの偏りを証拠として用いるものであることを示す。また，コーパス作成からデータ抽出の過程，データの解釈までの全体像を示したうえで利用上の注意点を示し，さらに，ユーザーフレンドリーな環境の普及によりマニュアル等を読まずに使えてしまうことから生じる危険性を指摘する。

参考文献：(1) Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press. (2) Leech, G. (2002) “Corpora and Theories of Linguistic Performance.” In J. Svartvik (ed.) *Directions in Corpus Linguistics*, 105–122. Mouton de Gruyter.

2. 日本語の小説における符号で表される沈黙に関する分析

新實葉子（立命館大学）

小説では，句読点，ダッシュ，リーダー等の符号を括弧内で用い沈黙を表す場合がある。日本語の句読法は，文部省 (1946) による「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」が慣習的に用いられている。しかし，小説における沈黙の表現方法の多様性と伝達されるメッセージに関して，コーパスによる調査が十分に進められていない。本研究は，青空文庫と小説投稿サイトのデータを用い，符号による沈黙の表し方を示すと共に，沈黙が聞き手・読者に伝える情報を考察する。調査結果として，以下 2 点を指摘する。①小説での符号による沈黙の表し方には，読者に話しかけるような調子で書く「新言文一致体」(佐竹 1980) から，視覚効果や脱規範性を志向する「超言文一致体」(三宅 2014) への変化が見られる (e.g. 複数人の沈黙を人数分の鉤括弧を入れ子にした「「「...」」」で表す)。②沈黙は返答拒

否だけではなく，不満や驚きを表出する「無言の発話者」の存在を明示するために用いられる場合がある。
参考文献：(1) 三宅和子（2014)「電子メディアの文字・表記：「超言文一致体」の現在と未来」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』183-198, 彩流社. (2) 文部省教科書調査課国語調査室（編）(1946)「くぎり符号の使い方〔句読法〕（案）」文部省. (3) 佐竹秀雄（1980)「若者雑誌のことば：新言文一致体」『言語生活』343, 46-52.

3. 中国語の自然会話における「不是」の談話機能について：マルチモーダル情報を含むコーパスに基づく調査

李嘉（岐阜聖徳学園大学）

本研究では，第一に，中国語の否定辞を伴う談話標識に関する研究（劉 2005; 殷 2011; 李 2017）を踏まえ，自然会話における否定表現「不是」の談話機能を考察する。第二に，「不是」が有する韻律的特徴を明らかにする。本研究の調査では，北京語日常会話を録画し，マルチモーダル情報を含むコーパスを構築し，「不是」を含む発話を抽出した。コーパス使用の注意点を示す共に，調査結果として，以下 3 点を指摘する。「不是」は, (a) 単なる否定文における副詞「不」+ 判断動詞「是」である場合, (b) 否定を表す応答詞, (c) 話題を回帰する際や自己修復を行なう際に用いられる談話標識, (d) 中国語の反語文である「不是...嗎」の「嗎」の脱落形式に分けられる。(a) から (d) の分類はイントネーションと発音の持続時間等の韻律的特徴にも違いがある。会話場面の映像を観察すると，少なくとも (b) の場合には特定の身振りを伴うことが分かる。
参考文献：(1) 李先銀（2017)『現代漢語話語否定標記研究』世界図書出版公司. (2) 劉麗艶（2005)「作為話語標記語的 “不是”」『語言教学与研究』6, 23-32. (3) Rühlemann, C. (2019) *Corpus Linguistics for Pragmatics*. Routledge. (4) 殷樹林（2011)「説話語標記 “不是”」『漢語学習』1, 38-47.

4. 字幕翻訳における談話標識の翻訳ストラテジーに関する語用論的研究：speaking of which を事例として

山内昇（大同大学）

視聴覚翻訳に関する研究によれば, I mean 等の談話標識は字幕の場合に翻訳されにくい。本研究では，話題転換を合図する談話標識である speaking of which が映画の日本語字幕において, (a) どの程度翻訳され, (b) どのような表現に翻訳されるのか, (c) 翻訳されない場合，前後文脈にどのような語用論的調節が施されるのかを考察する。本調査では, The Movie Corpus における 同表現の使用例の内，日本語字幕が存在する 277 例に字幕データを追加し，パラレルコーパスを構築した。調査結果として，以下 6 点を指摘する。①同表現の約半数は翻訳される。②後続節を伴わない場合は翻訳される。③「X と言えば」が使用され, which の先行詞が明示化される場合がある。④「そういえば」を使用し，先行詞を曖昧にする場合がある。⑤「そういえば」よりも使用範囲が広い「ところで」を使用する場合がある。⑥翻訳されない場合，先行発話の話題や後続節の発話行為等を調節し，唐突な話題転換が緩和される。
参考文献：(1) Chaume, F. (2004) “Discourse Markers in Audiovisual Translating.” *Meta: Translators' Journal* 49 (4), 843-855. (2) Mattsson, J. (2009) Subtitling of Discourse Particles: A Corpus-Based Study of Well, You Know, I Mean, and Like, and Their Swedish Translations in Ten American Films. University of Gothenburg.

口頭発表 / オンデマンド　質疑ライブ（11:35～14:05）

Ｂ会場

B①②司会：堀内ふみ野（大東文化大学）

B①11:35～11:50

映画ポスターにおけるキャッチフレーズの構成と語りの分析―日中対照研究―

王珏奇（金沢大学大学院）

映画ポスターのキャッチフレーズに関する先行研究では、発信者と受信者を含めたコミュニケーションの枠組みが考慮されていない。そこで本発表では、キャッチフレーズを語りの枠組みに位置づけ、分析した。まず、映画ポスターを構成するキャッチフレーズを①中心的キャッチフレーズ、②時間情報、③製作情報に分類し、この 3 種が日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズでどの

ような分布を持つのかを明らかにした。次に、山岡（2005）の物語のコミュニケーションモデルを参考に設定した語りの枠組みを用いて、①中心的キャッチフレーズを分析した。その結果、キャッチフレーズの伝達様式が、1)「語り手→読み手」、2)「語り手→キャラクター」、3)「キャラクター→キャラクター」、4)「キャラクター→読み手」、5)「複合」の 5 種に分類された。この分類を基に、日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズそれぞれの特徴的な伝達様式を明らかにした。

参考文献：(1) 山岡實. 2005. 『語りの記号論：日英比較物語文分析〈増補版〉』. 松柏社.

B②11:55～12:10

会話内の other-speaker formulation のフレーム比較分析

西山遥（慶應義塾大学大学院）

本発表では、会話における対話者の発言を、表現形式を変えて再構成する現象、other-speaker formulation を対象に、その先行会話からの意味変化について分析し、参与者が相手の発言の意味をどう解釈するのかを考察する。方法論にフレーム意味論を用いることで、先行研究の語彙レベルよりも広範な、発話レベルでの意味変化の分析を試みた。具体的には、アメリカ英語の会話コーパスから other-speaker formulation を抽出し、formulation とその先行会話各々に対し FrameNet に基づきフレームを付与、フレーム間関係を分析した。

その結果、formulation が先行会話と同じフレームを喚起する場合に加え、既存のフレーム間関係にはないが特定の文脈上で成立するような、出来事の前後関係や因果関係を示すフレームを喚起する場合が多く確認された。従って、聞き手は解釈の際に、相手の会話を文字通り、またはストーリー的に捉えて理解を示す傾向が強いと考えられる。

参考文献：(1) Deppermann, A. 2011. “The Study of Formulations as a Key to an Interactional Semantics.” *Human Studies*, 34(2), 115-128. (2) Hasegawa, Y., Lee-Goldman, R., Kong, A., and Akita, K. 2011. “Frame Net as a Resource for Paraphrase Research.” *Constructions and Frames*, 3(1), 104-127."

B③⑤司会：有光奈美（東洋大学）

B③13:10～13:25

遂行発話は本当に宣言なのか

佐藤雅也（京都大学大学院）

本発表は、遂行発話の聞き手はいかにして話し手の意図を理解できるのかという問題を扱うものである。通常、I order you to leave the room という発話は命令を意図するものであると理解される。では、なぜ命令であると理解できるのだろうか。Bach and Harnish (1979) によると、話し手は発話を通じて「話し手は命令する」という命題が真であると主張しているという。聞き手はそれが実際に真であると推測し、その発話自体が自分に対する命令であると理解する。Searle (1989) はこの主張説に反論し、その発話から第一に見出されるのは「命令する」と主張する意図ではなく、「発話を通じて命令を実現する」宣言を行う意図であると述べ、宣言説を提案する。本発表では、こうした論に対する批判を踏まえつつ、Searle による主張説への反論が成立しないこと、宣言説よりも主張説の方が現象を適切に説明できることを論証する。

参考文献：(1) Bach, K. and R. Harnish. 1979. *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge Mass: MIT Press. (2) Searle, J. 1989. “How Performatives work.” *Linguistics and Philosophy*. 12(5), 535-558.

B⑤13:50～14:05

Self-praise and politeness: Is gender relevant?

ITAKURA, Hiroko (Shinshu University)

Self-praise refers to a speech act initiated by a speaker to evaluate their own ability, accomplishment, and possessions, positively (Dayter, 2014). It is an under investigated speech act. Self-praise (e.g., “My exam results were so good.”) is a problematic speech act, especially for speakers of Asian languages including Japanese, as it clashes with the norm of politeness that we should avoid praising self and remain modest (Leech, 2007). However, self-praise represents individual speakers’ fundamental desire to have their self-value be positively evaluated by others (Spencer-Oatey, 2000). The present paper addresses the question of how Japanese speakers produce such problematic speech act by analysing naturally occurring conversational data selected from the corpus (BTSJ; Usami, 2018). Results included that Japanese speakers used both

direct self-praise and downgraded self-praise involving discourse strategies to conform to modesty. Second, use of different types of self-praise differed across gender. Implications for politeness research will be discussed.

Reference
Usami, Mayumi (ed.) 2018 BTSJ Natural Conversation Corpus with Transcripts and Recordings, NINJAL Institute-based projects: Multiple Approaches to Analyzing the Communication of Japanese Language Learners, Sub-project: Studies on the Language Use of Japanese Language Learners.

ポスター発表 / オンデマンド　質疑ライブ（13:30～15:05）

Ｂ会場

B④,⑥～⑧司会：有光奈美（東洋大学）

B④13:30～13:45

否定の可能構文に見られる行為指示型の用法に関する分析 -先行発話及び動作主のタイプに基づいて-

李娜（北海道大学大学院）

本発表は、否定の可能構文が表す行為指示型の用法を研究対象とし、先行発話や動作主を考察することで、発話内的な効力が生じる現象を明らかにすることを試みる。従来の研究では、否定の可能構文の用法について、「能力可能」と「状況可能」という可能の意味分類以外に、動作主が聞き手のような禁止や不許可を言及するものが多い（渋谷（1993）、加藤（2015）などがある）。しかしながら、ある文脈において、動作主は話し手や第三者の場合では、発話相手の提案に対する断りのような行為指示型の用法にも解釈できる。したがって、本発表は可能構文はどのような文脈において、動作主の種類や可能のタイプによってどういった行為指示型の用法が派生するかについて検討する。

参考文献：(1) 加藤重広（2015）「構文推意の語用論的分析：可能構文を中心に」『北海道大学文学研究科紀要』146 259-293 北海道大学文学研究科 (2) 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33−1 大阪大学文学部"

B⑥14:10～14:25

“Shitakke” Conditional and Deontic/Evidential Modality in Hokkaido Dialect of Japanese

HIRAMA, Yuta (Otaru University of Commerce, student)
NISIGUCHI, Sumiyo (Otaru University of Commerce)

We analyze the connective shitakke “and so/then” in Hokkaido Japanese as a modal inference marker, which is translated as deontic necessity or as epistemic judgment in predicate logic. When going out for dinner and deciding what to eat, Yuta would say “Shitakke ano piza-ya san-ni iko ((If you like pizza), we are going to that pizza restaurant),” upon knowing his friend likes pizza. If all individuals in the discourse like pizza, they will go to that pizza restaurant. Shitakke conveys deontic necessity for future plan. People should go to that pizzeria in all the worlds where current obligations are fulfilled. Moreover, when talking about the weather on a rainy day, we can say “Shitakke kion-wa hikui-ne (and so the temperature maybe cooler).” According to the perceived visual, auditory or hearsay information, the conversation participants conclude that it must be cooler outside. Thus, shitakke is a deontic or epistemic-evidential marker.

1. Aoki, H. 1986. Evidentials in Japanese. 2. Faller, M. 2002. Semantics and Pragmatics of Evidentials in Cuzco Quechua. 3. Kratzer, A. 1981. The Notional Category of Modality. 4. McCready, E. and N. Ogata. 2007. Evidentiality, Modality and Probability."

B⑦14:30～14:45

広告表現における「2 つの視座」の分析

加藤久俊（フリー）

消費者の価値観を変えることや、消費者に新たな認知を与えることを目的とする広告では、1 つの広告表現内に相反する態度(stance)とそれら複数の態度に対応する複数の視座が混在する場合がある。ここでの「視座(viewpoint)」とは、事態を捉える際の物理的または心理的な立場を指し、事態認識の焦点となる「視点(focus)」と区別している。本発表では、Fauconnier(1997)のように事態認識における視座と視点を明瞭に区別した先行研究と、Dancygier(2005)などの視座の移動や変化が事態認識に与える影響についての議論を踏まえて、上述した複数の視座が混在するタイプの広告表現にお

いて、2 種類の視座が用いられる場合があることを、メンタル・スペース理論の枠組みを用いて示す。さらにその 2 種類の視座が一致する場合と、一致しない場合の両方が存在することも合わせて提示する。

主要な参考文献：(1) Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Dancygier, B. 2005. "Blending and Narrative Viewpoint: Jonathan Raban's Travels Through Mental Spaces." *Language and Literature*, 14(2), 99-127.

B⑧14:50～15:05

看護実習記録における「N がみられる」と「N がある」の使い分けについて

山元一晃（国際医療福祉大学）

看護においては患者の主観的情報や客観的情報から解釈・判断をし、計画を立てることが重要とされる。そのため、看護系大学等で課される実習記録では、患者の症状や様子を的確に記述することが求められる。この患者の症状や様子を表す表現として、「N がある」と「N がみられる」の 2 種類が高頻度に観察される。これらが使い分けられているのかどうか、使い分けられているとしたら何らかのルールに基づくのかを、任ほか (2015) に手本として示されている実習記録を対照として分析した。その結果、「N がある」は、「目視では確認することが難しいこと」に用いられ、「Nがみられる」は「目視で確認できること」に用いられているようであった。また、交替可能なものについては、目視で確認する場合も、患者の主観による場合もあると考えられるものであった。この知見は、看護師を目指す留学生に対する実習記録の記述の指導に活用できると考えられる。

引用文献：
任和子(編). 2015. 『領域別看護課程展開ガイド』東京：照林社."

ポスター発表 / 掲示板による質疑応答のみ

若者ことば「ぴえん」に関する一考察

工藤　俊（駒沢女子大学）

本発表では、(1)に示すような、話者の感情を描出する若者ことば「ぴえん」を考察する。

(1)a.私こんな顔してたっけ？うえーんぴえん
b.最近肌が綺麗になってきて、ぴえん(嬉)
（twitter より引用）

「ぴえん」は、人の泣き声をオノマトペ化した若者ことばの一種である。この表現は、(1a)のようなネガティブな感情を表現する際に、感動詞的（石川(2018)）に用いられるのがデフォルトであるが、(1b)のように「喜び」という対極的な感情も表すことができる。本研究では、「ぴえん」の語法・文法を記述的に考察することから始める。そして、この表現の使用によって生じる語用論的効果について、2017 年頃をピークに若年層の間で流行した「マジ卍」（有光 (2018)）と比較しながら論じる。とりわけ本論では、以下の 2 点を主張する。

(2)a.「ぴえん」は、感動詞としての用法以外に、形容動詞としての用法がある。
b.「ぴえん」の使用による推論の負担は「マジ卍」よりも小さい。

参考文献：(1) 有光奈美．2018.「現代日本語における「まんじ」の記号と使用者による意味理解のメカニズム ―表現できないものを表現したい場合の一例―」、『経営論集』92、153-164、東京：東洋大学．(2) 石川創．2018.「感動詞の定義について」、『駒沢女子大学研究紀要』25、25-37、東京：駒沢女子大学．"

アメリカの大学生の会話における I don't know の用法について

小林隆（群馬県立女子大学）

本発表の目的は、アメリカの大学生が用いる I don't know という表現について、(1) Tsui (1991)の分類に基づいて各用法の頻度を示し、(2) I don't know の使用動機を「ポライトネス理論」と「話者交替」の観点から明らかにすることである。具体的には(2)の観点による(1)の再分類を提案する。大学生による会話のデータ（筆者が 2012 年にボストン市内の私立大学で採取。2-4 人の 19 グループによる約 7.5 時間の自然発話データ）では、「不確かさの表れ」（marker of uncertainty）の用法の頻度が圧倒的であったが、その用法を、ポライトネス理論の観点より、ポジティブ・フェイス侵害回避に関する用法としての「評価の回避」（avoiding disagreement）と、ネガティブ・フェイスの保持

に関する用法としての「コミットメントの回避」（avoiding commitment）に再分類する。また後者の用法は話者交替の観点から、会話のターン維持・譲渡の用法、「修復」（repair）に関する用法として説明が可能であることを示す。
参考文献：Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) Politeness: Some Universal in Language Usage, Cambridge. / Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking in Conversation," *Language* 50 (4), 696-735. / Tsui, Amy B. M. (1991) "The Pragmatic Functions of 'I don't know,'" *Text* 11 (4), 607-622."

「カモシレナイ」の用法変化とモダリティ機能ー語用論の観点からー

堀内夕子（大阪キリスト教短期大学）

本稿は、「カモシレナイ」のモダリティ機能について語用論の観点から論じたものである。
本来「カモシレナイ」は予測・可能性または推量表現として使うものである。従って何かを飲んだり食べたりした後「これ、好きかも（かもしれない）」と断言をあえて使用しない形式が選択される「カモシレナイ」は使えないとされている。このような口語表現「カモシレナイ」（縮約形～カモ）は世代が下がるほど容認度が高くなることが國澤（2013）により報告されている。そこで本研究では大学生 157 名にその使用度、使用される場面、話し手と聞き手のその場面での縮約形「～かも」意味の捉え方や使用目的を検証することを目的として記述式アンケート調査を行った。山岡（2018）の記述する配慮表現「カモシレナイ」の機能分類を援用し、若者言葉の「～カモ」の観察を通して新たなモダリティ機能について論じる。
参考文献：(1) 國澤里美．2013.「語用論の観点から見た認識モダリティ形式「カモシレナイ」について」『言葉と文化』、14、1-17．(2) 山岡政紀 2018.「日本語配慮表現の分類と語彙リストについて」『日本語コミュニケーション研究論集』7、3-11．"

11 月 29 日（日曜日）

口頭発表 / オンデマンド　質疑ライブ（9:30～12:30）

Ｂ会場

B⑨～⑫司会：牧原功（群馬大学）

B⑨9：30～9：45
英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能

金沢じゅん（東京大学大学院）

英語の一人称・二人称代名詞の I, we, you は、特定の文脈において、入れ替えて使用されることがある。例えば、I の代わりに you や we が使われたり、you の代わりに I や we が用いられたりする。本発表では、これらの置換的使用に焦点を当て、その根底にある語用論的動機を、話し手と聞き手の「対峙的関係」と「並列的関係」の調整という観点から分析する。I と you の置換は、聞き手との「対峙的関係」を喚起し、話し手を顕示したり、聞き手の存在を強調する。一方で、we の使用は、聞き手との「並列的関係」を意識させる。これらの代名詞の置換的使用は、聞き手との関係を調整することで、意見を押し付ける圧力を弱めたり、聞き手を対話に巻き込んだりする機能を持つのである。
参考文献：Wales, K. 1996. *Personal Pronouns in Present-Day English*. Cambridge University Press."

B⑩9：50～10：05
「寄与関係」の名詞修飾節における推論と明示化-日韓語の対比を通じて-

李載賢（名古屋大学大学院）堀江薫（名古屋大学）

本研究では修飾節と主名詞の意味関係を表すべき語句が潜在化している「縮約節」（益岡 2000）の中で、「可能」と「目的」という文法的意味を中心に、意味関係の推論と明示化という観点から日韓語の対照を行う。日本語は「留学に行く（φ/ための）費用」のように修飾節と主名詞の間に「ための」といった表現が挿入されなくても、意味を推論で補うことができる。一方、韓国語も同様に意味の補正が行われることがある。しかし、コーパスの用例を分析した結果、韓国語は「ための」のような表現を明示する傾向が高いことが分かった。このことは、日本語に比べて韓国語は語用論的推論による「補正」の範囲がより限定されていることを示唆している。

参考文献：益岡隆志. 2000.「連体修飾における縮約節」.『日本語文法の諸相』215-232. 東京：くろしお出版."

B⑪10：10～10：25
中国人日本語学習者の謝罪に見られる方策使用の特徴

李嘉隆（名古屋大学大学院）

本発表は、中国人学習者（以下 CJL）の日本語の謝罪特徴を中心に、日本語母語話者（以下 JP）の謝罪特徴と比較しながら、分析したものである。具体的には、被害の重さと、直接・間接原因によって、4 つの謝罪場面を設定し、CJL68 人、JP20 人のデータを談話完成テストを利用して収集した。そして、先行研究で指摘された日中間の差異が現れた方策が、CJL 資料でどのように使用されているかを決定木分析を用いて分析した。その結果、CJL 資料の「謝罪」、「損害修復」、「弁償」が、中国語の謝罪特徴と一致する傾向が見られた。特に「弁償」について、それに影響を与える主要な要因には、原因の直接・間接が関係しており、直接原因の場合は、被害の重さの影響も同時に受けていたことを確認できた。また、「理由説明」については、CJL が JP の間にそれほど差異は見られなかったが、言語表現に注目すると、原因の直接・間接によって、自他動詞の区別ができない、などの問題が現れた。
参考文献：（1）鄭加禎.2006.「謝罪行為における差異 ： 日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究」.『アジア社会文化研究』.7.57-73.（2）ボイクマン総子・宇佐美洋.2005.「友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策 - 日本語母語話者と中国語母語話者の比較 - 」.『語用論研究』.7.31-44"

B⑫10：30～10：45
慰め行動における性差 ――青春ものアニメの分析――

張楽（金沢大学大学院）

本研究の目的は、アニメに登場する異性友人間の慰め行動を相互行為という観点から分析し、男女間の慰め行動の同異を明らかにすることにある。これまで、慰め行動を相互行為という観点から段階分けし、段階ごとの言語行動の分析により、慰め行動の全体像を明らかにしようと試みた研究はない。そこで本研究では、慰め行動を「前慰め段階」、「慰め行動段階」、「後慰め段階」の三つに区分し、分析を試みる。本発表では、「慰め行動段階」に焦点を当て、意味公式を利用して慰め行動を分析した。その結果、女性のほうが使用する意味公式の量が多く、しかも多様であることが分かった。また、意味公式の連鎖は、男性の慰め行動では、現状肯定型のフローが見られ、女性の慰め行動では、行動重視型のフローが観察された。これを仮説とし、今後は、現実の友人間の慰め行動においても男女で典型的なフローが認められるのかどうかを、ロールプレイによる調査で検証する。

B⑬～⑰司会：小松原哲太（神戸大学）

B⑬10：55～11：10
接尾辞「-流、-式、-風」における含意の対立―たとえの類型への示唆―

三田寛真（東京大学大学院）

接尾辞「-流、-式、-風」は、主に名詞 N を語基としていずれも「N らしい、N における」といった意味で用いられる。本発表ではまず、それぞれの N 部や文脈の分布を特定し、三者が異なる含意を持つことを示す―いま対象のある側面 X について「N 流、N 式、N 風」と表現されるとする。N と同じく X を問題にでき、かつ N と上位概念を共有する成員（群）N’が読み込まれる。その上で、X が成立するのが N のみのとき「-流」、N と N’の両方のとき「-式」、N’のみのとき「-風」が用いられる―。さらに第二の議論として、ここで特定した対立パタンによって、三接辞の使い分けの記述以上に、従来は直喩・例示・推定等と区分されてきた“たとえ”の現象一般に関して、統一的な観点で、なおかつより細密な形で再分類が定義されることを主張する。つまり、たとえ一般を支配するパタンが、例として三接辞の使い分けに顕在化しているということである。
参考文献：山下喜代. 2011.「字音接尾辞「式・風・的」の意味―プロトタイプとスキーマ―」、『青山語文』41、130-142."

B⑭11：15～11：30
人間関係は触覚メタファー：「べたべた」のメタファーを例に

劉俊蘭（関西大学大学院）

Lakoff and Johnson(1980)では、私たちはメタファーを用いることで、人間の性格、動機、活動と

いう観点から理解することを可能にしていると指摘している。鍋島（2011）メタファーには身体性が不可欠であると主張している。本研究では<人間関係は触覚である>というメタファーに基づいて、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて、人間の触覚という身体感覚における「べたべた」を考察の対象とし、人間関係における「べたべた」のメタファー的意味の実現を実際の用例を基に考察する。そして、大量の例文に基づいて、「べたべた」が人間関係を概念化する時、ポジティブ的意味とネガティブ的意味があることを論じる。

参考文献：(1) 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版. (2) Lakoff, George and Johnson, Mark(1980)*Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.(渡部昇一,楠瀬淳三,下谷和幸 訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店)"

B⑮11：35～11：50

日本語修辞疑問文の（イン）ポライトネス

案野香子（静岡大学）

ブラウン＆レヴィンソン（1987/2011 以下 B&L）など従来の発話のポライトネス理論では、対人配慮（敬意）は話し手からの相手への一方向的なものと考えられていた。本研究では B&L の FTA 理論を批判的にとらえ、コミュニケーションは話し手と聞き手の双方向で行われていることを前提に、聞き手が発話者の修辞疑問文を解釈するうえでインポライトと解釈する条件について、関連性理論の枠組みにおいて論じた。

具体的には、話し手の修辞疑問文を次の（１）～（４）の四類型にわけ、発話の文脈を考慮しながら、聞き手にどのような認知効果をもたらすかを用例分析により考察した。

（１）文末が単独の「か」で終わる文。

（２）「誰が（動詞）た」で類型化される文。

（３）「何が（名詞）だ」で類型化される文。

（４）文末が「ものか」で終わる文。

参考文献：(1) Brown＆Levinson.1987.Politeness.Cambridge University Press.(ブラウン＆レヴィンソン田中典子監訳（2011）『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社). (2) Jonathan Culpeper.2005.” Impoliteness and entertainment in the television quiz show :The Weakest Link. *Journal of Politeness Research* 1(1):35-72."

B⑯11：55～12：10

国会討論におけるイン／ポライトネスとジェンダー

柳田亮吾（大阪大学）

国会に代表される公的談話はその歴史的経緯がゆえに「男性的」（直接的・競合的）であり、女性は：①「男性的」スタイルを獲得、使用することが困難、と同時に、②「男性的」スタイルを用いるとジェンダー・ステレオタイプ（女性＝間接的・協調的）によって否定的に評価される危険性が伴う（Cameron and Shaw 2016）。以上のジェンダーに起因する困難に注目しつつ、本稿では参議院予算員会における委員と内閣閣僚との質疑応答をデータとし、相互行為参加者達が国会という実践の共同体における相互行為の規範の交渉を通して（Mills 2003）、どのように個々の目的を達成しようとしているのかを明らかにする。参考文献：[1] Cameron, D. and Shaw, S. 2016. *Gender, Power and Political Speech: Women and Language in the 2015 UK General Election*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. [2] Mills, S. 2003. *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

B⑰12：15～12：30

日本語の不満談話シークエンスの開始部における共通基盤化 ― ロールプレイデータと日常会話データの比較から―

ASAD, Marina Bahaa（立命館大学大学院）

本研究では、日本語の「直接的不満表明」に着目し、会話参与者間で不満動機・状況が不満談話開始時に共有されている場合（ロールプレイデータの場合）と、共有されていない場合（日常会話データの場合）とで、不満談話シークエンスの開始部のやり取りにおいて、共通基盤化の構築がどう処理されるのを明らかにすることを目的とする。Kecskes (2009) で導入された「社会・認知的アプローチ」に基づき、上記二種類の不満対話データを分析した結果、前者の場合は、不満の受け手が不満状況の修復を試みようとして不満談話を開始し、相手と共有されていない新たな知識（Current Sense）を構築することを重視するが、不満発話者はそれを認めず現状に関して相手と共有していると想定

されるShared Senseによる共通基盤を基に対話を進めていくことが分かった。一方、後者の場合は、談話開始時に不満発話者が現状に生じた不満の動機を一方的に導入し、相手と Current Sense による共通基盤を構築していくことが見られた。

参考文献：
(1) Kecskes, I. and Fenghui, Z. 2009. "Activating, seeking, and creating common ground: A socio-cognitive approach." *Pragmatics & Cognition* 17(2): 331-335. (2) 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編). 2019.『動的語用論の構築へ向けて』第1巻, 東京: 開拓社. "

★リアルタイム方式★

１１月２８日（土曜日）

口頭発表 / リアルタイム（9:30～15:05）

Ａ会場

A①②司会：岡本雅史（立命館大学）

A①9:30～10:05

LINE チャットの会話における感動詞の分析：日本語母語場面と日韓接触場面の比較を通して

楊虹（鹿児島県立短期大学）・倉田芳弥（聖学院大学）

本発表では、日本語母語場面（以下日母）と日韓接触場面（以下日韓）という 2 つの場面における LINE チャットの会話に見られる感情表出の感動詞の分析と考察を通して、モバイルメディアを介したコミュニケーション及び異文化間コミュニケーションの特徴の一端を明らかにする。具体的には、①感動詞の形式及び生起頻度、②表出する感情の分類という 2 つの観点から日母と日韓の比較を行い、感動詞の役割を考察する。分析の結果、生起頻度については両場面に大差がないこと、形式については、共通の形式が少なく、送り手がその場に即して独自に創造して用いることがわかった。また、感動詞の示す感情は、両場面とも半分以上がプラスマイナスの評価を加えない「意外・驚き」の表出であるものの、日韓と比べ日母では、文脈に依存しない「感嘆」による感情表出で気持ちの高ぶりを示す傾向があることがわかった。

参考文献
(1) 岡本能里子. 2016. 「雑談のビジュアルコミュニケーション―LINE チャットの分析を通して」. 村田和代・井出里咲子(編)『雑談の美学：言語研究からの再考』. 213-236. 東京：ひつじ書房.
(2) 楊虹. 2018. 「映画における感情表出の感動詞の日中比較」、『人文』42.25-34.

A②10:10～10:45

中上級日本語学習者のヘッジ使用 ー中間言語語用論の観点からの考察ー

堀田智子（東北大学）

本研究では、ヘッジ表現を対人配慮に関わる言語的ストラテジーと位置づけ、中上級日本語学習者（以下、NNS）の使用実態を中間言語語用論の観点から探った。

ディスカッションでのやりとりを分析した結果、NNS の主な特徴として以下 3 点が明らかになった：(1) 1 人あたりの平均使用数は、日本語母語話者（以下、NS）に比べ有意に少ない、(2) 副詞や動詞（「思う」）など、命題の冒頭部分や中間に位置する言語形式、初級レベルで導入される言語形式を多用する、(3) 情報の不特定化や可能性の低さを示し、自身の発話内容に対する責任を軽減させることが多い。またフォローアップ・インタビューから、日本語の語用論規範を強く意識し、それに適応した言語使用をしたいと考える学習者は、言語形式、機能ともに NS の使用に近かった。

以上のことから、日本語学習者のヘッジの使用傾向は母語話者と異なっており、それらには語用論的規範の認識が影響することが示唆された。

参考文献:(1) Fraser, B. 2010. Pragmatic competence: The Case of Hedging. In Kaltenbock G. et al. (eds). *New Approaches to Hedging* (Studies in Pragmatics), 15-34. Bingley: Emerald. Group. (2) ボイクマン 総子. 2019. 「日本語の『断り』における語用論的能力の発達」『Eruditi: The CGCS Journal of Language Research and Education』3、14 – 28.

A③④司会：尾谷昌則（法政大学）

A③10:50～11:25

「とは言っていない」「と言っているのではない」「と言っているわけではない」の使い分けに関する語用論的考察

森　貞（福井工業高等専門学校）

「とは言っていない」「と言っているのではない」「と言っているわけではない」という表現は、①自分の発言(P)に端を発した「話し相手」の（否定的）発言(Q)に対する反駁、②自分の発言(P)から「聞き手」が推論するであろうと思われる内容(Q)の打ち消し、のいずれかの目的で使用される。①の場合、「と言っているのではない」「と言っているわけではない」の使い分けは、吉村（2013, 2014)で提案された「のではない」「わけではない」の意味規定を用いることで説明が可能であるが、②の場合には、上記３つの表現の表出に、同一の認知プロセスの関与が認められるため、そのままの形では使い分けの基準として適用できない。本発表では、②の場合は、Q がもたらすダメージの度合に応じた『否定の力』（ダメージを相殺する力）を有する表現が、①の場合は、Q への反駁時における自信度に応じた『否定の力』(反駁への反撃を抑える力）を有する表現が選択されている可能性を例証する。

(1)Yoshimura, Akiko (2013) “Descriptive/Metalinguistic Dichotomy?: Toward a New Taxonomy of Negation.” *Journal of Pragmatics*, 57, pp.39-56. (2)吉村あき子（2014)「否定のタクソノミーに関する認知語用論的研究―記述否定・メタ言語否定再考―」科学研究費助成事業（基盤研究 C)）研究成果報告書. "

A④11:35～12：10

「V て、どうぞ」―SNS における陳述副詞「どうぞ」の拡張的用法―

三瀬凪乃（立命館大学文学部学生）・岡本雅史（立命館大学）

本発表の主眼は、主に SNS 上で使用される「V て、どうぞ」表現の「どうぞ」の新用法に着目して、その意味や機能を先行研究における「どうぞ」の用法と比較しながら分析し、こうした新奇な用法が SNS という特殊な空間に由来したものであることを指摘している点にある。具体的には、Twitter から「V て、どうぞ」表現のさまざまな用例を採集し、先行研究をもとに構文分析と意味分析を行うことで、「V て、どうぞ」表現における「どうぞ」が「どうか」の意味も包摂した、意味・機能的に拡張された用法で使用されていることを明らかにする。さらに、こうした用法が木村（2003)の投擲的発話と類似性を持つことから、SNS 特有のコミュニケーション環境が新たな言語表現や言語変化を生み出す可能性を示唆する。

参考文献：(1) 武内道子. 2015. 「ポライトネス表明＜どうぞ＞と＜どうか＞」、『手続き的意味論―談話連結語の意味論と語用論』、195-216、東京. (2) 木村大治. 2003. 『共在感覚―アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』. 京都.

A⑤～⑦司会：堀江薫（名古屋大学）

A⑤13:10～13:45

Synchrony/Diachrony, *Seeing* from the Descriptive Perspective on Grammaticalization: The Case of *Seeing*

HAYASHI, Tomoaki (Kindai University)

This presentation details a descriptive qualitative analysis on the “static” type of grammaticalization (Mair 2004), which is not reflected in large changes in frequency. This study conducts a synchronic analysis of the deverbal preposition/conjunction *seeing (that)* by collecting 241 examples of *seeing* from the British National Corpus and classifying them into two grammatical categories (preposition and conjunction) and subcategories. The analysis result supports the finding by Hayashi (2015), according to which prepositional *considering* and conjunctional *considering* are used in written and spoken texts, respectively; further, as a grammaticalized deverbal preposition/conjunction, *seeing* exhibits the same tendency as *considering*. The analysis results indicate that prepositional *seeing* and conjunctional *seeing* tend to be used in written and spoken texts, respectively. Therefore, the current study illustrates that the synchronic descriptive approach toward grammaticalization reveals the contemporary layers of language change.

References: (1) Hayashi, T. 2015. “A Synchronic Study of Prepositional and Conjunctional Uses of Considering: From the Viewpoint of Register.” *Proceedings of the 17th Conference of the Pragmatics Society of Japan* 10. 105-112. (2) Mair, C. 2004. “Corpus Linguistics and

Grammaticalisation Theory: Statistics, Frequencies, and Beyond." In H. Lindquist and C. Mair (eds.), *Corpus Approaches to Grammaticalization in English*. 121-150. John Benjamins.

A⑥13:50～14:25
他動詞文における語用論―介在性の他動詞文―

前田宏太郎（東京大学大学院）

本発表は，佐藤（2005）等で議論されている介在性の他動詞文（例 山田さんが家を建てた）と呼ばれる現象を取り上げ，この種の他動詞文は結果含意の他動詞文（例 花子が窓を壊した）とは意味論的に相違なく，「介在性」の解釈は，話者が会話において因果連鎖の中から適切な粒度で原因項を選択する際に無視された原因群の一部に際立ちの高い存在(典型的には人間)が含まれている場合に，語用論的に得られるものだと主張する．このことは，被使役主の存在を明示した使役文（例 山田さんが大工さんに家を建てさせた)が介在性の他動詞文にはない含意を持つ点からも支持される.但し，全ての他動詞文で介在性の解釈が得られるわけではなく，語彙概念構造において，様態の指定がなく結果の指定がある動詞にのみ限られると考える（Levin and Rappaport Hovav 2010）.

参考文献：(1) 佐藤琢三．2005.『自動詞文と他動詞文の意味論』東京：笠間書院．(2) Rappaport M. H., and B. Levin. 2010. "Reflections on manner/result complementarity." In Rappaport, M. H., and I. Sichel (eds.), *Lexical semantics, syntax, and event structure*, 21-38. Oxford: Oxford University Press.

A⑦14:30～15:05
日本語とインドネシア語の禁止サインの比較 ―駅構内の「禁止表現」をめぐって―

Muthi Afifah（金沢大学大学院）

対面的なコミュニケーションの場合、「禁止行為」は、相手の行動を制限するため、発話する際に表現への一定の配慮が必要となる。しかし、不特定多数を相手にする公共の場の禁止サインは、社会的ルールや常識、衆多の支持などを背景とするものが多いため、配慮は必要ないとされる（中崎, 1999)。しかし、実際に身の回りにある禁止サインを見ると、「駆け込み乗車はおやめください」のように配慮を含んだ丁寧な禁止表現が使用されているものもある。本発表では、文化的背景の異なる日本とインドネシアの対応する場面に設置された禁止サインの比較を試みる。データ収集は、生命に危険を及ぼす行為を禁止する禁止サインが多く設置されている駅構内で実施した。収集されたデータを分析した結果、日本語の場合は、禁止される内容や場面によって使用される禁止表現が異なるが、インドネシア語の禁止サインはほとんどがあからさまに表現されていることが分かった。

参考文献：(1)Brown, Penelope and Steven Levinson.1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press (邦訳：田中典子監訳（2011）『ポライトネス　言語使用におけるある普遍現象』研究者). (2)中崎温子.1999.「「禁止/不許可」提示・標識表現の・英語対照分析」、『北陸大学紀要』23、179-189.

会員総会 / General Meeting（15:15～15:35）

Ａ会場

会員の方はご参加ください。

議題：本大会のテーマについて・大会発表賞の発表表彰・会長等役員の改選についてなど

会長就任講演 / President Lecture (15:40～16:40)

Ａ会場　　司会：小野寺典子（青山学院大学）

日本語にイン／ポライトネス研究が必要なわけ

日本語用論学会会長
滝浦真人（放送大学教授）

イン／ポライトネス研究を“異議申し立て“の歴史として見ることができる。そこには、敬語型ポライトネスに対する異議申し立てやポライトネス偏重に対する異議申し立てが含まれる。

日本語で、敬語研究は盛んだが、ポライトネス研究はそれほどでもなく、インポライトネス研究はさらに人気がない。なぜだろうか？ 一つには、日本語が典型的な敬語型言語であることと関わっているように思える。言語形式が際立つことになる結果、形式の規範的な使用にばかり関心が集まる

（「気になる日本語」）。形式を通して人が表したいと思っているポライトネスの機能を探ることには理があっても、しかし形式すなわちイン／ポライトネスとは言えない。一方、ヨーロッパでインポライトネスが研究された始まりは、自分が言われて嫌だったことを集めたものだった。日本語イン／ポライトネス研究における形式の偏重に対する異議申し立てがなされてもいい頃かもしれない。

もう一つの背景要因として、「建前と本音」が定着しすぎた文化が関わっているように思える。ポライトネスは多分にふるまいの問題であり、それゆえ建前的である。インポライトネスは多分に気持ちの吐露であり、それゆえ本音的である（誹謗中傷やヘイトスピーチに表れる憎しみ）。日本語の場合、ポライトネスとインポライトネスが反対概念ではないということの反映がこの点に見られる。"美しくない"日本語と日本人に、文学や社会学は切り込んできたが、言語学はどうだろうか？ 日本語語用論におけるポライトネスの偏重に対する異議申し立てがなされてもいい頃なのかもしれない。

特別講演 / Special Lecture (16:45～17:45)

Ａ会場　　司会：小山哲春（京都ノートルダム女子大学）

場の語用論―パラダイムのハイブリッドを求めて

井出祥子先生（日本女子大学名誉教授）

戦後、民主主義国家として歩んでいるはずの日本において、敬語が未だに使われているのは何故か。日本語で終助詞なしではおしゃべりできないのは何故か。 主語なしで話せるのは何故かなど、英語をスタンダートとするグローバル社会からみると日本語への疑問は多々ある。これに対して論理的解釈を可能にするものが「場の語用論」である。これは、西欧の言語文化を基に構築された理論から解放されなければ世界の多くの言語のあるがままの把握はできないと標榜する「解放的語用論」研究プロジェクトの産物である。

まず、場の語用論の論集『場とことばの諸相』（2020 年 11 月 12 日刊行）から場の語用論を援用した論文をいくつか紹介した後、場の語用論のパラダイムが既存の語用論のパラダイムと異なる前提（①個人→場、②客観的視点→内在的視点、 ③静的把握→動的把握）に立つことを説明する。その上で、日本語と英語の具体 例を示しながら「文化と言語」の関係（言語相対論）が場の語用論で説明可能となることを論じ、最後に今後の言語研究に何故場の理論が必要かを述べる。

井出祥子（いで さちこ）
国際基督教大学大学院修士課程修了
日本女子大学文学部英文学科教授を経て同大学名誉教授

主著書・主編著

- 藤井洋子と共編書『場とことばの諸相』（ひつじ書房）（2020）
- 「グローバル社会へのウェルフェア・リングイスティックスとしての場の語用論―解放的語用論への挑戦」『社会言語科学』第 18 巻第 2 号(2016)
- 藤井洋子と共編『解放的語用論の挑戦―文化・インターアクション・言語』(くろしお出版) (2014)
- 『わきまえの語用論』（大修館書店）（2006）
- 平賀正子と共編著『異文化とコミュニケーション』（ひつじ書房）（2005）
- Robin Lakoff と共編著 *Broadening the Horizon of Linguistic Politeness*. (John Benjamins Publishing Co.) (2005)
- Richard Watts and Konrad Ehlich と共編著 *Politeness in Language: Studies in its History, Theory and Practice*. (Mouton de Gruyter) (2005)

懇親会 / Conference Banquet （18:00～20:00）

会場：REMO（オンライン懇親会）　大会参加登録者の懇親会参加は無料です。

今回は、リアルタイムでの懇親会に近い雰囲気をご提供できるオンライン会議ツール『REMO』を使用し、ビデオ・オーディオ・チャットによるコミュニケーションを通して、楽しく有意義な交流と議論の場にしたいと考えております。お一人でもご遠慮なくお越しください。皆様のご参加をお待ちいたしております。(懇親会用の『REMO』サイト情報は、ご参加の皆様に別途お知らせいたします。)

11 月 29 日（日曜日）

口頭発表 / リアルタイム（9:30～12:10）

Ａ会場

A⑧⑨司会：秦かおり（大阪大学）

A⑧9：30～10:05

A Pragmatic Analysis of Interactions among Speakers of English as a Lingua Franca on a LEGO Task: Exploring the functions of other-initiated repair in ELF communication

YAMAGUCHI, Masataka（Kobe City University of Foreign Studies）
TANIMURA, Midori（RITSUMEIKAN University）

The aim is to gain insight into communication among speakers of English as a Lingua Franca (ELF) by analyzing goal-oriented interactions. By examining the way in which these speakers interact, we demonstrate the process of negotiation, accommodation, and adaptation. Through analysis, we argue that one of the functions of ""other-initiated repair"" (Schegloff et al., 1977) is to metalinguistically resolve referential ambiguity and further get the participants back to the task. Our data are taken from circa 12 hours of video-recorded interactions among eight groups of ELF speakers. They are instructed to build LEGO bricks in a way that represents abstract concepts such as “responsibility”. Analytically, we focus on revealing the functions of other-initiated repair and show that repair is used not only to “resolve misunderstandings” (Bjørndahl et al., 2015) but also to keep the task on track. Implications for pedagogy are also provided.

References

Bjørndahl, J. S., Fusaroli, R., Østergaard, S., & Tylén, K. (2015). Agreeing is not enough: The constructive role of miscommunication. *Interaction Studies*, 16(3), 495-525.
Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382."

A⑨10：10～10：45

The Appendor Wh-Question in Cascading Troubles Sequences

JONES, Sally（Nagoya University, graduate student）

This paper will take a conversation analytic approach to examining the appendor wh-question in cascading troubles sequences. In such repair sequences, the repair solution for the first trouble then becomes the new trouble source. This paper will focus on sequences that contain an appendor wh-question repair initiator — a linguistic format consisting of a preposition plus a wh-question. Through the analysis of naturally-occurring conversations in English, it was revealed that the appendor wh-question is used in cascading troubles sequences, being the second repair initiator in the sequence. The appendor wh-question points to the initial repair solution, in addition to the initial trouble source turn, as being not sufficient enough for understanding. Furthermore, the initial repair initiator is a relatively weaker repair initiator in terms of locating the trouble source compared to the relatively stronger appendor wh-question. This suggests an order to the repair initiators being used in cascading troubles sequences.

Reference:

Lerner, G. H., C. Kitzinger and G. Raymond. (2009). “Some Sources of Cascading Troubles in the Organization of Repair.” Paper presented at the 95th Annual Convention of the National Communication Association, Chicago, IL."

A⑩⑪司会：ツォイ・エカテリーナ（一橋大学）

A⑩10：55～11：30

日本語の名詞句内における省略の談話的制約

松本大貴（京都大学大学院）

本発表では，先行研究では観察されていない，日本語の名詞句拡大投射内における省略に働く談話的・情報構造的制約について議論する．具体的には，Watanabe (2006, 2012)で提唱されているような名詞句拡大投射を想定し，(1)のそれぞれの文を先行文として受けた場合，なぜ(2)では助数詞を含む読みができないのかについて，Kuno (1995)や神尾・高見（1998)などで提唱されている「情報の流

れの原則」と，「省略順序の原則」の観点から考察する．
(1)
a. ジョンはポールのアルバムを５枚買った．
b. ジョンはポールのアルバム５枚を買った．
c. ジョンは５枚のポールのアルバムを買った．
(2) ジョージはリンゴのを買った．
主要参考文献: 神尾昭雄・高見健一. 1998. 『談話と情報構造』東京: 研究社 / Kuno, S. 1995. “Null elements in parallel structures in Japanese.” In Mazuka, R. and N. Nagai (eds) *Japanese Sentence Processing*, 209-233. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers."

A⑪11：35～12：10
ロシア語の不定人称文の情報構造について
水野庄吾（京都大学大学院）・松本大貴（京都大学大学院）
本発表では, ロシア語の不定人称文の動詞の屈折について情報構造の観点から議論する. 具体的に, 本発表では，先行研究では見過ごされてきた以下の事実を指摘する: (1)のような不定人称文では，文脈上主語が３人称単数であっても，動詞の屈折は複数形になる．さらに，この事実に対して，伝統的な分析と比較した上で，情報構造的な観点から説明を与える．具体的に，(1)のような例では，目的語が話題化を受け，残留した動詞が焦点化を受けていると主張する．さらにこの分析が，主語が焦点となる非対格動詞からは不定人称文が作れないことからも支持されることを見る．
(1)Mnje podarili knigu.
I-DAT gave-3PL book-ACC
‘I was given a book’
主要参考文献:(1) Shibatani Masayoshi. 1985. “Passive and Related Constructions：A Prototype Analysis” *Language* 61, 4. 821-848. (2) Храковский В. С. Концепция диатез и залогов (исходные гипотезы – испытание временем) 2001. 505-519."

昼食休憩 / Lunch （12:30～13:30）

シンポジウム / Symposium （13:30～16:10）

Ａ会場

シンポジウム：会話分析の基軸と展開

司会：井出里咲子（筑波大学）
登壇者：早野薫（日本女子大学） 高木智世（筑波大学）
岩田夏穂（武蔵野大学） 城綾実 （早稲田大学）

主旨

近年、日本における会話分析研究は，言語学，社会学，心理学，教育学など，幾つもの「隣接領域」と接合しながら，その関心，貢献の対象を拡大しつつある。その中で，会話分析研究者は何を見ようとしているのか。会話分析にはどのような可能性があり，他の隣接領域のアプローチとどう異なるのか。このような問いを背景に、各登壇者が、「会話分析」という独自の目的と視点と道具立てを持つ手法を用いて自身が関心を持つフィールドに分け入ることによって、どのような視野が立ち現われるのかを紹介する。

登壇者紹介

早野薫（日本女子大学）：家族や友人間の日常会話、保育場面、サービス場面、授業場面での会話などをデータとして扱い、認識性を主要なキーワードとして会話分析研究を行なっている。

高木智世（筑波大学）：日常会話や（非定型発達児を含む）子どもを参加者に含む相互行為を対象とし、間主観性や共感性の確立を社会的相互行為の具体性の内に捉えていくことに関心がある。
岩田夏穂（武蔵野大学）：専門は日本語教育で、日本語の学習者と母語話者の相互行為における参加の様相に関心がある。最近は、雑談におけるからかいや自己卑下を中心に会話分析の手法で分析している。
城 綾実（早稲田大学）：会話分析を用いてさまざまな状況における共同活動について研究している。相互行為産出時に人々が行う調整、とくに身体面の調整が相互行為に与える影響の解明に関心がある。

1. 相互行為における認識性

早野薫（日本女子大学）

会話分析において，「対象について知り，語る権利」に関わる人々の配慮，すなわち「認識性（epistemics）」は，発話の組み立て，行為の理解，発話連鎖など，会話組織における様々な領域において重要な働きをするものであることが示されてきた。本発表では，まず，日本語会話データからの例を挙げながら，これまでの研究で明らかにされた認識性の射程を概観する。その上で，会話分析において展開している認識性の研究が，言語学，語用論におけるに認識的モダリティ，証拠性に関する研究といかなる点で親和的であり，いかなる点で相補的であり得るかを考察する。

2. 相互行為秩序と相互理解―定型発達児・非定型発達児の相互行為

高木智世（筑波大学）

会話分析は、社会学のエスノメソドロジーを源泉とする。ゆえに、その関心は、「日常会話」「会議」「診療」「尋問」といった特定の社会的相互行為場面として理解可能となる秩序を生み出し維持するためのさまざまな「人々の方法（エスノメソッド）」を実証的・経験的に解明することに照準されている。このことを踏まえ、本発表では、次の２つのことを試みる。１）定型発達児と非定型発達児それぞれの相互行為を「定式化作業」という実践に着目して分析し、両者の異同を明らかにする。２）１）の分析を通して、人々の実践がすなわち相互行為秩序であると捉えることの意味を検討する。

3. 日本語教育における会話分析の役割―たとえば「からかい」をどう扱うか

岩田夏穂（武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科）

「からかい」は、情報の適切な伝達と受信のスキルの育成を目指す言語教育の現場で、ほとんど注目されてこなかった。しかし、実は参与者間の関係構築と維持に重要な役割を果たす行為である。本発表では、「からかい」のターゲットと生起環境を中心に、会話分析の手法を用いて日本語母語話者の雑談を分析してきたこれまでの成果を紹介する。さらに、初級後半の日本語学習者と母語話者の雑談に観察される「からかい」の特徴を示す。そして、会話分析を通して見えてくる、一見教える必要がないように見える会話上の振舞いを、日本語教育の現場でどう扱うべきかについて検討したい。

4. 相互行為における身体資源

城 綾実（早稲田大学人間科学学術院）

会話分析は音声言語の分析に偏重していると批判されることがある。しかし、会話分析の創始者の一人である Schegloff による身体資源に着目した研究は、近年盛んになっている研究トピックのいくつかにとって重要な知見となっている。本発表では、まず、会話分析はその初期から身体や物質、環境を相互行為資源として研究対象に含むものであり、身体資源に着目した研究においても会話分析の基軸に忠実な分析が重要であることを確認する。次に、観光場面のデータをもとに、人々の身体上部の捻りと諸活動の管理について、Schegloff の研究ならびに複合的活動（multiactivity）や移動性（mobility）といった研究トピックにも触れながら紹介する。

閉会式　Concluding remarks　（16:40～16:55）

Ａ会場

★談話室★

大会リアルタイム開催期間中（11 月 28・29 日）、談話室を開設致します。

こちらでは、オンライン会議ツール『REMO』にて、語用論研究にまつわる話やよもやま話など、皆さんに自由にお話しいただける場をご提供いたします。談話の場、また、憩いの場としてご活用ください。（『REMO』サイト情報は、ご参加の皆様に別途お知らせいたします。）

★書籍展示★

言語学関連出版社の書籍展示を二通りの方法で行います。詳細は追ってお知らせしますので、日本語用論学会ホームページにてご確認ください。

●出展出版社の展示サイト入口（11 月 25～29 日）

大会特設サイトから各出版社のオンラインストア（各社特設サイト）へのリンクを列挙掲示します。

●「REMO 書店」（11 月 28・29 日）

今大会では、REMO を活用した書籍展示の試みも行われます。談話室・懇親会のオンライン会場として使用する REMO のテーブルの一部を利用して出版社が書籍展示を行います。

PSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJ

大会実行委員長：　山岡 政紀（創価大学）
オンライン開催委員：　尾谷 昌則（法政大学），八木橋 宏勇（杏林大学）

大会企画委員会・委員長	尾谷 昌則（法政大学）
副委員長	井出 里咲子（筑波大学），岡本 雅史（立命館大学）
委員	有光 奈美（東洋大学），小松原 哲太（神戸大学），堀内ふみ野（大東文化大学）
大会発表委員会・委員長	金丸 敏幸（京都大学）
副委員長	西田 光一（山口県立大学），横森 大輔（九州大学）
委員	小松原 哲太（神戸大学）
大会発表賞小委員会委員長	西田 光一（山口県立大学）
大会運営委員会・委員長	山岡 政紀（創価大学）
副委員長	八木橋 宏勇（杏林大学），竹田 らら（東京電機大学）
委員	甲田 直美（東北大学），牧原 功（群馬大学）

日本語用論学会会長：　滝浦　真人（放送大学）
日本語用論学会事務局長：　北野　浩章（愛知教育大学）
日本語用論学会事務局：　〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1
愛知教育大学　人文社会科学系　日本語教育講座　北野浩章　研究室内
E-mail：secretary@pragmatics.gr.jp

PSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJ